「記念講演」

健体康心をめざした農医連携のすゝめ

北里大学名誉教授　陽（みなみ）　捷行（かつゆき）

〈プロフィール〉 1943年山口県萩市生まれ。北里大学名誉教授。静岡大学農学部卒業、東北大学大学院農学研究科博士課程修了後、農林省入省。農業環境技術研究所理事長。元北里大学副学長。生き物文化誌学会会長。「地球の悲鳴」「土壌圏と大気圏」「18cmの奇跡」「農医連携論」など著書多数。日本農学賞・読売農学賞、日本地球環境技術賞など多数の受賞。直近では、この5月、「農耕地から発生する温室効果微量ガスの評価と削減技術の開発・普及」が評価され「日本農業研究所賞」を受賞した。

〈講演概要〉

人びとの永遠のねがいは、「健体康心」、すなわち健やかな体と康（やす）らかな心を維持し続けることにあります。現実の日々の生活のなかで健康とは何でしょうか。世界保健機関（WHO）の定義は、「健康とは、完全に、身体、精神、および社会的福祉によい（安寧な）状態であることを意味し、単に病気でないとか、虚弱でないということではない」とあります。

世の中を患わしている病の一つに、「分離の病」があります。人と人・親と子・生産者と消費者・生徒と教師の分離、事実と事実・自然科学と社会科学・人と自然の分離、過去と現在と未来の分離、技術知と生態知の分離、など枚挙に暇がありません。これらは、「知と知の分離」「知と行の分離」「知と情の分離」などとも言いかえることができます。また、専門分野への没頭、仮想と現実の離合、デタッチメント（認知的距離）とパフォーマティブ（遂行的距離）の分離、不易流動や温故知新などとも表現できるかもしれません。

農学と医学がほどよく調和していない現実もまた、分離の病の一つの形態といえるでしょう。医学の父、医聖などといわれるヒポクラテスの「食べ物について知らない人が、どうして人の病気について理解できようか」という言葉は、農学と医学の連携が必要であることを、言い得たものでしょう。

果物や作物は土壌から、肉は草を食べる動物から生産されるので、この聖賢の言葉は次のような言葉に変えることができます。「土壌について知らない人が、どうして人の健康について理解できようか」。ヒポクラテスは、ほかにも「汝の食事を薬とし汝の薬は食事とせよ」「食べ物で治せない病気は医者でも治せない」など、有益な言葉を数多く残しています。

健康の基本は、健全な土壌で安全な食物を生産し、これを継続的に食し、人間のもつ自然治癒力を高めることにあります。さらに健康にとって重要なことは、「スピリチュアル：精神的な、心の、霊的な、形而上の」という概念をもち、これを昂揚させることです。身体・精神・福祉・スピリチュアルの条件がそろって、はじめて人は健体康心、すなわち健康を獲得できるのです。

健全な食物はどこから生まれるのでしょうか。それは健全な環境、とくに土壌環境を除いてほかにありません。すなわち農と健康は、環境とくに土壌を通して連携しているのです。別の表現をすれば、健康を獲得するためには、農医連携の科学が必要なのです。

本講演では、「分離の病」「農医連携とは」「代替農業と代替医療」「農医連携を心した人びと」「農医連携の動き」「土壌と食」についてお話しします。